

機関番号：11201

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520003

研究課題名 (和文) 「知覚行為論」構築のための現象学的・生態心理学的・相互作用主義的研究

研究課題名 (英文) A Study for Constructing "Perception Act Theory": From the Point of View of Phenomenology, Ecological Psychology, and Interactionism

研究代表者

小林 睦 (KOBAYASHI MUTSUMI)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：20292170

研究成果の概要 (和文)：本研究は、現象学、生態心理学、認知科学の比較検討を行ない、「知覚行為」という観点から、相互作用主義的な知覚論の可能性を考察する試みである。そのために、(1) 現象学と生態学との関係を考察すべく、19 世紀の生物学者であるドリーシュやユクスキュルの主張に対し、ハイデガーが行なった批判的な評価内容を解明すること、(2) 生態系における人間の位置づけを確認するために、生態系のうちで動物が棲まうことの意味について進化論の知見を踏まえつつ分析すること、(3) こうした「生命/環境」にかんする基礎概念について、具体的には、「生氣論/機械論」「進化」「環世界論」「生態系」などの諸概念について、検討・整理すること、を行ない、その成果を論文等の形で公表した。

研究成果の概要 (英文)：The aim of this research is to compare the conceptual resemblances and differences among phenomenology, ecological psychology, and interactionism, furthermore, to investigate the possibilities of interactive theory of perception, from a point of view of "perception act". The results of this research were (1) to elucidate the contents of Heidegger's critical evaluations on the assertions about perceptive world by H.Driesch and Von Uexküll, (2) to analyze the meanings of living in ecosystem, with the aim of confirming the place of human beings in that, and (3) to examine and clarify the fundamental concepts on (life/environment), for example, "vitalism/mechanism", "evolution", "surrounding world", and "ecosystem" etc..

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 哲学・倫理学

キーワード：知覚行為論, 現象学, 生態心理学, 相互作用主義, J.J. ギブソン

## 1. 研究開始当初の背景

現象学は、意識の三つの様態である知覚、想起、予期のうち、その根本モデルを知覚のうちに見出してきた。知覚は、経験のもっとも根源的で明証的なあり方を示している、と考えられてきたからである。本研究は、この知覚のあり方について現象学が行なった主張を、19世紀から20世紀にかけて提唱された知覚論と照らし合わせつつ、21世紀における知覚論の可能なあり方を探る試みである。申請者はこれまで、空間知覚という観点から、19世紀以降の生理学・心理学・認知科学などと現象学とを比較することにより、このような課題を探求しようとしてきた。本研究は、そうした問題意識をさらに発展させ、〈知覚〉を環境と主体との「相互作用」における〈行為〉として把握し、新たな「知覚行為の現象学」を構築することを意図して計画されたものである。

## 2. 研究の目的

本研究の主要な目的は〈現象学〉と〈心理学・認知科学〉の関係を、知覚の本性にかんする理解という観点から問い直すことにある。フッサール現象学は、19世紀の実証主義における自然主義的傾向に対する対抗運動として成立し、自然主義の典型である心理学を批判することを通じてその形を整えていった。その点からすれば、フッサール現象学と心理学との結びつきは本質的である。また、フッサール以後の現象学は、その後の生理学・心理学・認知科学との相互的な影響関係のうちで、さらなる発展を遂げている。そうした点を踏まえるならば、現象学と認知科学との結びつきも無視することはでき

ない。

本研究は、〈現象学〉と〈心理学・認知科学〉とのそうした関係のうち、具体的には、(1) E. フッサールや M. ハイデガーによる〈現象学 (Phänomenologie)〉、(2) J. J. ギブソンにより提案された〈生態心理学 (ecological psychology)〉、(3) 近年認知科学の分野で議論されている〈相互作用主義 (interactionism)〉の三つの立場について、それぞれが知覚の本性をどのようなものとして捉えているのかを比較検討することを目標としていた。知覚は受動的な感覚の統合ではなく、能動的な行為の連関であるというのがこれらの知覚論に共通する見解であり、そのような解釈に本研究も与するからである。これまでの研究では、知覚のこうした性質を「知覚の行為性 (enactive nature of perception)」と呼んできたが、本研究では、それを「知覚行為 (perception act)」と名づけた上で、「知覚行為論 (perception act theory)」を構築することを目標に、主体と世界とのあいだで成り立つ認識基盤としての知覚の構造を明らかにすることを試みた。

## 3. 研究の方法

本研究は、〈現象学〉と〈心理学・認知科学〉との関係について、特に、フッサールやハイデガーによる〈現象学〉、ギブソンによって提案された〈生態心理学〉、および、近年認知科学の分野で議論されている〈相互作用主義〉の三つの立場について、それぞれが知覚の本性を解釈する仕方を比較検討する、という方法を採用している。知覚は受動的な感覚の統合ではなく、能動的な行為の連関であるというのがこれらの知覚論に共通する見解で

あり、そのような解釈に本研究も与するからである。

より具体的に言えば、本研究の方法は以下の二点を特徴とする。

(1) 19世紀後半から20世紀前半の生理-心理学説との関連において知覚の行為性を解明しようとする科学的なアプローチ。

本研究の主要な主題である「知覚行為」について、フッサール、ハイデガー、ギブソンは、それぞれ当時の心理学や生理学・生物学との独自の関わりのなかで分析を行なっている。一方で、現象学的な知覚論において、①フッサールの場合はシュトゥンプの心理学的な空間表象論から、ハイデガーの場合はユクスキュルの生態学的な環境世界論から、それぞれ看過しえない影響を受けている。他方で、生態心理学において、②ギブソンの場合は G.L. ウォールズの生態学的な視覚論が、決定的な重要性をもっている。こうした影響関係は彼らの生きた時代に特有なものであるため、現代では見えにくいものとなっている。本研究では、こうした点を意識しつつ、主として19世紀後半から20世紀前半にかけての生理-心理学説との比較研究を行なうことを通じて、それぞれの知覚理論を時代の文脈に据え直すことを試みた。

(2) 20世紀後半以降の認知科学を参照点として現象学の見直しを行なおうとする認識論的なアプローチ。

本研究は、③現代の相互作用主義的な知覚論からフッサール現象学を逆照射する試みである。ここ数年の研究では、ギブソンの「知覚システム」論を参照することにより、現象学的な知覚論を検討する作業を行なってきた。そうした研究の延長として、現代の認知科学の知見を豊富に取り込んだ A. ノエや S.L. ハーリーによる知覚解釈のアプローチを手がかりに、「知覚行為」という観点から現象学的な知覚論を再考するという点が、もう一つの特徴となった。認知科学によって新たに明ら

かにされつつある学問的な蓄積に焦点をあてることによって、心理学・認知科学と現象学との接点を確定することができるからである。

#### 4. 研究成果

本研究は、現象学と生態心理学、認知科学と生態心理学との比較検討を行ない、「知覚行為」という観点から、相互作用主義的な知覚論の可能性を考察することを試みた。

具体的には、19世紀後半から20世紀前半の生理-心理学説との関連において知覚の行為性を解明しようとする科学的なアプローチにもとづいて、特に知覚行為と生態環境との相互作用のあり方についての分析を行なうことが、研究の中心的な課題となった。そうした観点からの研究成果としては、主として以下の三点を挙げるができる。

(1) 第一に、現象学と生態学との関係を考察する中で、特に19世紀後半の生物学において、①ハンス・ドリッシュが提唱した生気論的な「エンテレヒー (Entelechie)」概念、および、②フォン・ユクスキュルが提唱した「環世界 (Umwelt)」が、それぞれハイデガーの知覚世界論に対してどのような影響を与え、ハイデガーがそれをどのように評価したかを確認することを行なった。その上で、ハイデガーが規定した有機体の本質規定を、「抑止解除 (Enthemmung)」および「朦朧性 (Benommenheit)」という鍵概念から捉え直すことを行なった。こうした研究の成果は、論文「ハイデガーと生物学—機械論・生気論・進化論—」として発表された。

(2) 第二に、生態系における人間の位置づけを確認するために、生態系のうちで動物が棲まうことの意味

について、生物学-人間学的な観点から検討することを試みた。そのために、①環境に適応するための手段として動物が巣作りをすることにはいかなる意味があるのか、②動物が実際に構築するさまざまな巣のあり方はどのようなものか、③そうした動物の中で人間が〈巣=住まい〉をもつことの特徴はどのような点にあるのか、についてR. ドーキンスによる「延長された表現型 (extended phenotype)」という概念を踏まえて分析を行なった。こうした研究の成果は、報告書「生態系・巣・住まい—生物学-人間学的な観点から—」として発表された。

(3) 第三に、以上のような「生命/環境」にかんする基礎概念について確認するために、「生気論 / 機械論」「進化」「優生学」「QOL」「環世界論」「生態系」といった具体的諸概念についての検討・整理を行なった。こうした研究の成果は、著作『岩波講座 哲学 08 生命/環境の哲学』「概念 方法」として発表された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 小林 睦 「ハイデガーと生物学—機械論・生気論・進化論—」『アルテス・リベラレス』(岩手大学人文社会科学部紀要) 第82号, 2008, 査読有, pp. 1-16

[図書] (計2件)

- ① 小林 睦 『生命と環境の倫理』第6章～第9章「環境の倫理」(清水哲郎編, 放送大学出版振興会) 2010, pp. 85-149

- ② 小林 睦 『岩波講座 哲学 08 生命/環境の哲学』概念と方法; 「生気論 / 機械論」「進化」「優生学」「QOL」「環世界論」「生態系」「共有地の悲劇」「環境倫理の座標系」(清水哲郎編, 岩波書店) 2009, pp. 229-248

[その他]

- ① 小林 睦, 放送大学・TV放送教材『生命と環境の倫理 ('10)』第6回～第9回

[報告書] (計1件)

- ① 小林 睦 「生態系・巣・住まい—生物学-人間学的な観点から—」『持続可能な地域社会の実現と「住まい」のあり方について—「エコ住宅・福祉住宅」の可能性に関する学際的研究—』調査報告書(平成20・21年度岩手大学部局戦略経費) 2010, pp. 129-132

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小林 睦 (KOBAYAHSI MUTSUMI)  
岩手大学・人文社会科学部・准教授  
研究者番号: 20292170

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし